同一社会文化を背景とするモノリンガルとバイリンガルの説得の戦略
－エートスと議論の型の観点から－

西條　結人（広島大学）

1. はじめに

「説得」とは，送り手が，主に言語的コミュニケーションを用いて非強制的なコンテキストの中で，納得させながら受け手の態度や行動を自らが意図する方向に変化させようとする（深田, 2002）行為である．「説得」は，話し言葉，書き言葉の両方によって行われるが，ルリヤ（2020）によれば，書き言葉は，読み手のいない所での言語行為であり，想定している読み手を書き手は頭の中で想像し，読み手の反応を考えなければならないという．書き手と読み手が異なる空間，時間に存在するため，書き手の見えない場所でフェイス侵害行為が起こる可能性も考えられる．

「説得の戦略」は，レトリックの説得の中身と方向を決定する「構想」領域において，エートス，ロゴス，パトスという 3 つの基本概念によって決定される（徐・柳澤, 2007）．エートスは話し手（書き手）の性格を描くことによって説得する要素，ロゴスは論理的に説得する，または，論理的に説得したと感じさせる要素，パトスは聞き手（読み手）の感情を誘導するとによって説得する要素であり（柳澤, 2006），記述と口述の説得において欠かせない基盤である（リース, 2014）．特に，説得を目的とする文章においてはエートスが書き手の説得効果を大きく左右する重要な要素である（柳澤, 2006; リース, 2014）．ロゴスには，議論の型（トポス）と呼ばれる下位概念があり，人々が通常説得的であると考えている事柄，また説得的な効果を持つとされる方法を概観したものである（バーク, 2009）．議論の型は「常識＝通念」（蓋然的論拠）に関連しているため，時代や文化と共に変化する可能性があるものである（野内, 2002）．書き手にとっては，エートスをどのような議論の型と関連させ，読み手を説得しようとするかかが重要となると考えられる．

複数の言語や文化的価値観が 1 つの社会の中で共有されている「同一社会文化」を背景とするモノリンガルとバイリンガルの言語使用と社会文化には密接な関わりがあり，話者間の言語使用をめぐる価値観は異なっている（トラッドギル, 1975）．特に旧ソ連諸国では，1 つの社会において，基幹民族言語とロシア語への価値観が，ソ連時代とは変化しており，社会的問題となる可能性が指摘されている（堀口, 2018; 柳田, 2020）.文章における説得に関する研究ではモノリンガルに関する研究が行われており，言語ごとに固有の構造を有していることが報告されているが, 2 言語以上の言語能力を有するバイリンガルの「説得の戦略」についてはあまり明らかにされていない．

そこで，本研究では 1 つの社会の中でキルギス語とロシア語の二言語を主な言語背景とするキルギスにおいて，キルギス語・ロシア語のモノリンガルとバイリンガルによる文章における「説得の戦略」の特徴を明らかにすることを目的とする．

2. 先行研究

本節では，「説得の戦略」及び Connor and Lauer（1985）の「説得的アピール」を分析項目とした研究をまとめる.「説得の戦略」と「説得的アピール」は，アリストテレスの「ロゴス」「エートス」「パトス」に基づき，レトリックの「構想」領域における説得の中身と方向性を決定する要因を明らかにするための分析項目である．

「説得の戦略」研究は，エートスに着目した研究（柳澤, 1991; 西條, 2021），ロゴスに着目した研究（柳澤, 1993; 香西, 1993），エートス，ロゴス，パトスの 3 要素に着目した研究には徐・柳澤（2007）がある．議論の型の選択には書き手の思想や世界観が反映される可能性があること（香西, 1993），各議論の型による書き手の性格の傾向はエートスにおける表現効果の違いとして出現すること（柳澤, 1993）が明らかになっている．また，言語別に見れば，英語（大統領就任スピーチ）の説得力はエートスからパトスへの転換が重要であること（柳澤, 1991），日本語と韓国語（新聞社説）において，日本語はエートスに，韓国語はパトスに集約されること（徐・柳澤, 2007），キルギス語とロシア語（意見文）のモノリンガル及びバイリンガル間で好まれるエートスに差が生じることが指摘されている（西條, 2021）．

「説得的アピール」に関する研究には Connor and Lauer（1985）, Kamimura and Oi（1998），近藤（2013），西條他（2015）がある． Connor and Lauer（1985）は「説得的アピール」を,「言論」「信頼性」「情動」の 3 つのアピールに分類している．た

だし, Connor and Lauer（1985）の「信頼性」のアピールは,「言論」と「情動」に含まれる可能性があり, Kamimura and Oi（1998）は「信頼性」を除外し, 近藤（2013）及び西條他（2015）も「信頼性」を外し, 独自概念の「道徳」「習慣」のアピールを立てている. 英語話者は「言論」（Kamimura and Oi, 1998）, 日本語話者は「情動」（Kamimura and Oi, 1998; 近藤, 2013）, ウズベク語話者は「道徳」（近藤, 2013）, スペイン語話者は「習慣」（西條他, 2015）の使用率が高いことが明らかにされている.

「説得の戦略」に関する研究は, 1 つの言語, もしくは異なる言語間の比較研究が中心であり, バイリンガルに関する研究は西條（2021）のエートスの分析に留まっている. 一方で, 「説得的アピール」に関する研究は, 全体の傾向を明らかにしたものであり, それぞれのアピールが互いにどのように関わっているのかについての質的な分析には至っていない. モノリンガルだけではなく, バイリンガルにも注目し, 一つひとつの事象を詳細に観察する「説得の戦略」に着目し, それぞれいかなる機能を有し, 読み手に対してどのような説得効果をもたらしているのかに着目する研究も必要であると考えられる.

先行研究における課題を踏まえ, 本研究では次のような研究課題を設定した.

研究課題 1：同一社会文化を背景とするモノリンガルとバイリンガルは, 意見文においてどのような「エートスと議論の型」を用いるか.

研究課題 2：意見文の「エートスと議論の型」において, キルギス語・ロシア語バイリンガルのそれぞれの言語的な優位性はどのように表出するか.

3. 調査方法

本研究では, 書き手の意見や主張を, 根拠に基づいて論理的に述べ, 読み手を説得する文章である意見文（近藤, 1996）を扱うこととし, 伊集院・高橋（2012）を参考に「インターネット社会において新聞や雑誌は必要か」というテーマの.課題文を作成した. 意見文課題はキルギス語, もしくはロシア語で収集し, データは筆者が日本語訳したものを使用し, 日本語訳についてはキルギス語, ロシア語を母語とし, 日本語が堪能な協力者を通じて訳出した文章の正確さを確認した. 課題の読み手の設定は, 書き手と同じ言語文化圏（母語場面）とした. 分量は分析に必要な最低限の語数を確保するため, キルギス語意見文については 150 語以上, ロシア語意見文については 180 語以上とした.

本研究での調査対象とする意見文は, (1) キルギス語モノリンガル【キルギス語意見文】(KK), (2) ロシア語モノリンガル【ロシア語意見文】(RR), (3) キルギス語・ロシア語バイリンガル（キルギス語優位）【キルギス語意見文】(KRK), (4) キルギス語・ロシア語バイリンガル（ロシア語優位）【ロシア語意見文】(KRR）から成る. (1) から (4) 群いずれも, キルギスの大学に所属する大学生から成り, 回答者には「日常生活において回答者が書く場面において最も使用する言語」（Skutnabb-kangas, 1984）で作文を書いてもらうことにした. 調査は 2019 年 1 月から 2 月にかけてビシケク市にある 3 つの大学に通う大学生 112 名に回答を依頼し, KK18 編, RR29 編, KRK37 編, KRR28 編の意見文データを得た.

本研究では, 書き手がどのように読み手の信頼性を得ようとしているかを検証するため, まず「エートス」に着目し, Connor and Lauer（1985）の「信頼性のアピール」の定義や例を参考に KK, RR, KRK, KRK の 4 つのグループの意見文データを質的に分析し「書き手の直接的体験」「書き手の読み手への関心と視点に対する敬意」「書き手と読み手が共有する関心と視点」「書き手の性格の良さ, もしくは判断力」の 4 つのカテゴリーに分類した.

次に, 出現したエートスとロゴスとどのように関連しているのかを明らかにするため, Weaver（1970）の「状況」「因果関係」「類似」「定義」による 4 つの議論の型（トポス）とエートスの関わりに関して分析を行った. Weaver（1970）の議論の型は, 主張する判断が同じであっても, 論証する議論の型の選択には, 書き手の個性が反映される（香西, 1998）. また, 書き手の主体性の強弱, 状況への依存度, 対象への本質の迫り方がそれぞれ異なる（柳澤, 2006）. 例えば「定義」の議論の型は, 書き手の主観だけで決まり, 主体性が 4 つの型の中で最も高く, 「定義」と「状況」は対極に位置関係にある（柳澤, 2006）.

本研究では Weaver（1970）の議論の型は, エートスを中心とした形で再解釈されるべきものであり（柳澤 1993）, エートスとロゴスが共に読み手の共通認識に訴えるものである（リース, 2014）ことを考慮し, パトスの概念は分析の対象から外し, エートスと議論の型に着目し, 分析を進めることとした.

4. 結果と考察

モノリンガル群（KK, RR）を見れば, KK は, エートス「書き手の直接的体験」と議論の型「状況」, エートス「書き手と読み手が共有する関心と視点」と「状況」, エートス「書き手と読み手が共有する関心と視点」と「類似」を用いる例が確認された. RR の「エートスと議論の型」では, エートス「書き手の直接的体験」と「類似」, エートス「書き手と読み手が共有する関心と視点」と「類似」, エートス「書き手の性格の良さ, 判断力」と「定義」が用いられている例が確認された.

これらのことから, KK では「状況」の議論の型とエートスを組み合わせて用いる書き手が多いと言える. KK は意見文に

おいて，「定義」や「類似」のような書き手の主観性が強いとされる立論形式を避け，書き手の主観性が弱く，非主体的で，非本質的な立論形式を好むと考えられる．一方で，RR の意見文では，「類似」や「定義」が用いられていたことから，KK よりも書き手の主観性の強さを出して，読み手をリードする主体的で本質的な立論形式とエートスを組み合わせる説得方法を好んでいることがわかる．

バイリンガル群（KRK, KRR）を見ると，KRK では，エートス「書き手の直接的体験」と「状況」，エートス「書き手の読み手への関心と視点に対する敬意」と「状況」，エートス「書き手と読み手が共有する関心と視点」と「状況」，エートス「書き手の性格の良さ，判断力」と議論の型「状況」を用いている例が確認された．KRR については，エートス「書き手の直接的体験」と「状況」，エートス「書き手と読み手が共有する関心と視点」と「状況」，エートス「書き手の性格の良さ，判断力」と「状況」，エートス「書き手の性格の良さ，判断力」と「定義」を用いる例が確認された．

KRK では全ての種類のエートスが出現し，用いられている議論の型はいずれの例も「状況」であった．KK のキルギス語意見文と比較をすると，KK と共通して，キルギス語が優位であるキルギス語・ロシア語バイリンガルにおいても，書き手が非主体的で，非本質的なものに議論の根拠を求めている意見文が好まれると考えられる．一方，ロシア語意見文 RR と KRR を見ると，RR は「類似」や「定義」といった本質的で書き手の主観が強く出現する主体的な立論形式を好むのに対し，KRR は「状況」という「類似」や「定義」の議論の型と対極の位置にある立論形式を好んで用いる傾向が確認された．「状況」を好むというキルギス語話者の特徴が出現しており，ロシア語意見文でありながら，キルギス語話者間で好まれる立論形式を用いた可能性も考えられる．

一方で「定義」を用いている KRR も見られることから，ロシア語話者間で好まれる立論形式を用いたバイリンガルと，キルギス語話者で用いられる立論形式が KRR の中で混在していることも推測される．香西（1983）によれば，「定義」による議論の型が有効であるためには，その類や属性が一般に承認されたものでなければならず，人によって解釈が異なると，この立論形式は難しいものになるという．したがって，「定義」がロシア語意見文において有効な議論の型であると仮定すると，キルギス語意見文での枠組みや，書き手の共通認識と異なった場合に，説得力を維持することが難しくなる．また，「状況」は，物事の本質や原則とのつながりを欠いた最も哲学的ではない議論の型である（香西，1983）ことから，書き手の主体性を重んじる「定義」を好むロシア語意見文の枠組みから外れており，読み手がキルギス語話者なのか，ロシア語話者なのかによって，文章の説得力に差が生じる可能性がある．

また，分析を通して，同じ「エートス」でもその内容には違いがあることが示唆された．キルギス語話者について，モノリンガル KK と比較すると，バイリンガル KRK では使用される「エートス」の種類が多くなっていることから，第二言語としてのロシア語教育の影響も考えられる．加えて，冒頭にキルギス語の挨拶表現 саламатсыздарбы.（salamatsïzdarbï）を置く等，KK の意見文には見られなかった要素が見られたのも，キルギス語優位のバイリンガルの特徴であろう．

ロシア語話者については，モノリンガル RR とバイリンガル KRR を比較すると，キルギス語話者のように使用する「エートス」には明確な違いが見られなかったが，用いられる立論形式が異なり，書き手の主体性や対象の本質への迫り方が異なる可能性があることが確認された．

リース（2014）によれば，トピックと関連して，「共通認識」がある．「共通認識」とは，共有された知恵，部族全体の前提である．「共通意識」はそれぞれの文化に特有なものであり，普遍的真理として通っていることが多い（リース，2014）．キルギスのように，複数の言語がリンガフランカとして併用されている同一社会文化における「説得の戦略」については，所属する言語コミュニティによって「共通認識」が異なる可能性が明らかになった．

5. 今後の課題

本研究では，同一社会文化におけるバイリンガルの「説得の戦略」を，「エートスと議論の型」の観点から明らかにした．今後は，データをさらに追加し，本研究の結論を検証する必要がある．また，本研究ではなるべく多くのデータ数を確保するために，キルギス語，ロシア語，キルギス語・ロシア語バイリンガル（キルギス語優位），キルギス語・ロシア語バイリンガル（ロシア語優位）の言語能力については，回答者による自己判断を基準とした．産出される文章の質にも影響することが考えられること，より詳細な回答者の言語背景を把握した上で研究結果の分析が可能となることからも，言語の使用頻度とともに，回答者の第一言語，第二言語の言語能力についても考慮し，データ収集を行う必要がある．

本研究では書き手が用いる「説得の戦略」の特徴を明らかにすることに留まっており，モノリンガルやバイリンガルの書き手が書いた文章を，読み手がどのように理解し，書き手の意図する通りに読み手の意識や態度の変容が起こるかについては検証できていない．「説得」という行為の性質からも，書き手だけではなく，読み手が，書き手の文章をどのように理解し，文章を読む前と読んだ後で，どのような意識や態度の変容が見られるのかという観点からも分析を進めることで，同一社会

文化を背景とするバイリンガルの「説得の戦略」の特徴をより明らかにすることが可能になると考えられる.

また, 本研究の意見文データを収集する過程で, 特に, キルギス語モノリンガルが既定の語数に届かないことや, 書きにくさを感じ, 断念する様子も見られた. バイリンガルについてはダブル・リミテッド等の要因を考慮しながら, 書き手が「説得の戦略」を描き切れず, 主張を十分に語ることができなかった文章を分析することも検討したい.

謝辞　本研究の実施にあたり, 広島大学大学院人間社会科学研究科の永田良太教授, 松見法男教授, 柳澤浩哉教授にはレトリックや説得の分析の観点及び考察の示唆等に関して多くのご教示をいただいた. 深く感謝を申し上げる.

参考文献

バーク・ケネス（2009）. 動機の修辞学　森常治（訳）晶文社.

Connor, U. and Lauer, J.（1985）. Understanding Persuasive Essay Writing: Linguistic/Rhetorical Approach. Text, 5（4）, 309-326.

深田博己（2002）. 第 1 章　説得研究の基礎知識　深田博己（編）説得心理学ハンドブック―説得コミュニケーション研究の最前線―　北大路書房, 2-43.

徐洪・柳澤浩哉（2007）. 日韓の新聞社説におけるレトリック―説得戦略の違いを考える―　表現研究, 85, 12-21.

堀口大樹（2018）. インタビュー調査に基づいたバルト 3 国のロシア語系住民の言語状況の考察　スラヴ文化研究, 16, 1-21.

伊集院郁子, 高橋圭子（2012）. 日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文の構造的特徴―「主張」に注目して―　日本語・日本学研究, 2, 1-16.

Kamimura, T. and Oi, K.（1998）. Argumentative Strategies in American and Japanese English. World English, 17（3）, 307-323.

近藤章（1996）. 第 3 章 ジャンル別表現の技術 5 「意見文」の作文技術　国語教育研究所（編）作文技術指導大事典　明治図書, 225-241.

近藤行人（2013）. 説得のアピールを用いた日本語学習者の論証文の分析―日本人大学生, ウズベキスタン人大学生との比較―　第二言語としての日本語の習得研究, 16, 160-177.

香西秀信（1993）. 議論法にあらわれたラスコーリニコフの弱さについて―ひとつの修辞学的分析―　宇都宮大学教育学部紀要. 第 1 部, 43, 1-11.

香西秀信（1998）. 修辞的思考―論理でとらえきれぬもの―　明治図書.

リース・サム（2014）. レトリックの話 話のレトリック―アリストテレス修辞学から大統領スピーチまで―　松下祥子（訳）論創社.

ルリヤ・アレクサンドル（2020）. 新装版　言語と意識　天野清（訳）金子書房.

野内良三（2002）. レトリック入門―修辞と論証―　世界思想社.

西條結人, 田中大輝, 小野由美子（2015）. 意見文課題における説得のアピールの日西対照研究―日本とスペインの学生の作文比較―　教育実践学論集, 16, 95-107.

西條結人（2021）. 同一社会文化を背景とする バイリンガルの説得のストラテジ――キルギス語とロシア語の意見文のトピックに着目して―　広島大学大学院人間社会科学研究科紀要. 教育学研究, 2, 454-463.

Skutnabb-Kangas, T.（1984）. Bilingualism or Not – The Education of Minorities. Multilingual Matters.

トラッドギル・ピーター（1975）. 言語と社会　土田滋（訳）岩波書店.

Weaver, Richard M.（1970）. Language is Sermonic. In Johannesen, Richard S., Strickland Rennard and Eubanks, Ralph T.（Ed.）. Language is Sermonic: Richard M. Weaver on the Nature of Rhetoric. Louisiana State University Press., 201-225.

柳田賢二（2020）. リンガフランカから単一言語話者の母語への影響による言語変化について―ウズベキスタンのロシア語リンガフランカとロシア語単一話者を題材に―　Slavistika 東京大学大学院人文社会系研究科スラヴ語スラヴ文学研究室年報, 35, 435-452.

柳澤浩哉（1991）. 政治演説の修辞学的考察―ケネディー大統領就任演説におけるエトス―　表現研究, 53, 20-27.

柳澤浩哉（1993）. トポスによる説得的言論分析の試み―近松におけるロゴスの意味―　日本研究, 8, 21-39.

柳澤浩哉（2006）. 第 2 章 言語使用と社会・文化 第 6 節 レトリックと言語行動　縫部義憲（監修）・町博光（編）講座・日本語教育学第 2 巻 言語行動と社会・文化　スリーエーネットワーク, 146-159.